Sweet Smell Sodeko

Sweet Smell Sodeko
女神異聞録デビルサバイバー Fan Book

Sweet Smell Sodeko

女神異聞録デビルサバイバー Fan Book

ニジャァ
アアア
はぁ……
今日も疲れたなぁ
キュッ
ホントこの先
どうなっちゃうん……
あれ？　アマネさん
なんでこんな時間に
こんな所……
ミ——ッ
んんぅ
申し訳ありません……
これも、世界の為
なのです……

へへへ……
それじゃあアマネ様もいなくなったところでお楽しみといこうぜ
ひっ
いやぁ
やっ…やだぁ
やめてよぉ
もみ もみ

もうッ
お願いだから・・・あッ
ぐぢ
そんなトコ……
触っちゃ……ぁあんっ

おいおい……
そんなに乱暴に
しちゃあ
その娘が
可哀想だろ？

こういう事は
きちんとして
やらないと
……なぁ？

この人は……
助けて……
くれてる？
それじゃあ……
まずはキスからな

ん、ッッ

ッッ!?

ふぁ……
ファーストキスは
彼にって決めてたのに

誰ともわからない
奴にぃ……ッ

ぴちゃ

ぴ

ぺろ

ぺろ

ぺろ

はぁ……

へへッ　もしかして
はじめてだったかい？

ちゅ
じゅる

んむっ

だ、だめぇッ……
こんな人達に
いいようにされて

やぁっ
もうやめてよぉ

ふぁあっ

キスまでされて……
はぁあっ

へへっ……
まぁそう言うなよ
キスしたんだから
もういいよなぁ？
やぁ
あっ
ひぁっ
ムワッ
うへっ
ビクッ
ビクッ
さすがに一週間近くも
洗ってねぇと
ニオってくるな

はぁ……

はぁ……

なんなの……わざわざ
汗臭くなってるトコロに……
こんなのおかしいよぉ

やぁっっ！

そ……そんなト
嗅いじゃ……ぁ

レロ

ひぅぅっ

な、舐めっ!?

レロ
レロ
やあっ
へへ……
なかなか良い
二オイだなぁオイ

ここは結構敏感
なんじゃねぇか？
つう
ひゃうっ
ビク
やだぁ……やめて
やめてよぉっ！
ザワ
ザワ
まぁ
そう嫌がるな

ビクッ
トッ
ビクッ
ひぁあ
ベロ
レロッ
んんうっ
やっ
レロ
はぁ
はぁ
やだ……ぁ
ワキ……舐めら

へへ……若い娘のニオイだぁ
俺はコッチ側を頂くとするぜ
ヤッ！
!?
もうヤだぁ
ブルブル
ビクッ
ぅぅ
しゅ
しゅ
チュプ
ジュルルッ

ワキなんて……
もぉ……

ムワァッ

ビクッ

うぅ……
こんなのやだよぉ……

ブルブル

んなこと言いつ
結構感じてんじ
ねぇのか？

そ……そんな事
な、いい……ッ

はぁ

ビク

ぶるん

そろそろ俺達も
満足させてくれよ

まぁいいや

ひゃうっ

何…!? コレぇ…っ

ぷるん

ホラ

ワキ上げな

ぷるん

ふぇっ

ぐぐッ

ぷるんぷるん

なかなかいい具合じゃねェか

スプッ

ジュプ

ズッ

ズッ

ズッ

おお

腋にオチンチン擦りつけられて……
ズッ
ズッ
こ……こんなのおかしいのに……ぃっ
ん
ふぅう
はっ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
あぁっ
17
お……おぉスゲーいいっ
ズッ
ズッ
ズッ
まさにっ……ワキマンコッ！

おぉ……
マジスゲぇッ

すべすべモチモチして
この感触だけで
イけそうだぜぇ

はぁっ

んっ
くっ

ズッ

ズプッ

ズッ

うおぉっ
ビビッ
ビビッ
ドビッ
ふぁぁっ
ビチャッ

はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
あっ
次はおっぱいで
やっ
ぶるん
ビリィ
あぁ

やぁ

まぁそう
イヤがるなって

キャッ

やだぁ

モミ
モミ

あぅ

ムニ

ムニュッ

ひぁっ

うひょおぉぉ

ムニッ

ムギュッ

あっ

メチャクチャ
やわらけぇ！

乳首も
コリコリだなぁ

クリュ

ひぐぅ

クリ

ブル ブル

はぁ

はぁ

はぁ

クリ

ほら　自分でこのバカでかいおっぱいを

はぁ

はぁ

はぁ

はぁ

レニュン

むにゅ

しっかりささえておくんだ

はぁぁぁ!?

こうするんだよッ

こ……今度は何する気なの

はぁ

はぁ

はぁっ
あ……熱いのがオッパイの間にぃ
んくぅ
はぁ
んぐぅ
おほぉ この乳マンコは最高だぜ……ッ
プン
アル
ズプッ
ムニィ
ヌプッ
ズニュッ
こんなの気持ち悪いだけのハズなのにぃ……
おぉッ 自分からチンポ扱き始めたぜッ
ぐぃ
はぁ
はぁ
はぁ
くほぉッ この爆乳圧半端ねぇッ
ぐぃ

こうなりゃついでに
咥えさせてやるぜ

ズッ

グプッ

ズプッ ズッ

ん

ふおおっ
タマんねぇッッ
もうっ

ズプッ

ん っ

ジュプッ

ぐむぅ

んはっ

んぶうう

ビュッ

ビュルル

ビクッ

ビクッ

ボタッ

ボタッ

トロッ

あ……はぁッ
口の中に精液が

苦くて……
変な……味

でも……
身体が……火照って……

へへへ……こっちはどうなってるかねぇ

サワ

サワ

あっ脱がせちゃあッ

ぺろっ

んっ

ピクッ

なかなか可愛い尻じゃねぇか

ぷりんっ

ひあっ

み、見ないでぇッ

ヒクヒク

ぷるっ

アナルもヒクヒクしてるぞ

うほぉ
ムニュ
おっぱいみてェな柔らかさだぜ
モミ
モミ
クリ
クリ
やっな、何をッ
ビクッ
ひぃンッ!?
ズイッ
ズイッ
お尻に……指……いいッ
ギュプッ
ニチャ
やだぁっ気持ちワルイよぉぉ
パク
パク

そらっ
ズッ
ツプッ
や……やだっ
お尻なんて……ェ
なかなか良く
吸い付いてくるぜ
ぬ
ぬぬ
うぅ……
ひゅう
んっ
や…
やあっ
ひゅうう
ズプッ
ズプッ

ホントに…もう…

ブル

ブル

んひぐ

そう言うなって

もう二本も咥え込んでるぜ

あへあっ

ズプッ

んんっ

ジュプッ

ヌプッ

もう大分とほぐれてきた

ふへへ……もうすっかりほぐれて
パク
パク
物欲しそうにパクパクしてるなぁ
んぅぅ
ぐっ
ピト
力を抜かないと割けても知らねぇぞ
ひあぁぁッ
あ
ぐぃ…
ひぐぅ
ズプッ

おぉ……良いカンジに吸い付いてくるぜ

ひぃっ

ズプッ

ズプッ

おひり……はいって……へぇッ

ギチ

ギチ

奥まで突かれてッ

めくれちゃうッ

あはぁうッ

気持ち悪いはずなのに……どうしてぇッ

ズプッ

嫌がってる割に感じまくってんじゃねぇのか

ホラ、前も挿入れてやるよッ
ズッズッ
ズッ
あひぃっ
んぶぅっ
ズッ
はぁっ
はぁっ
はぁっ
こんなにされたら……おかしく……なっちゃうぅッ
ズプ
ズン
パン
ズプ
ズン
パン
パン
射精すぞぉ
オ、オレも

ドプ
ビュクッ
ドプッ
はぁっ
あぁぁぁぁぁぁっ
ぷるん
ぷるん
ビュルルッ
ビュルル
ビュル

ビクンッ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ドロッ
ドロッ
はぁ
はぁ
はぁ
堕ちましたか……
これであの方を邪魔する者は
誰一人存在しない……
世界は……
救われるので

次のページからは

黒色彗星帝国さんの

ゲストSSになります。

◆

最初は、胸の中に熱した鉄の棒でも突っ込まれたのかと思った。
「あっ♥　は、やんっ♥　……んっ、は、激しい、よぉ……ッ♥」
「はは、す、すごいねぇユズちゃん。もうすっかり、……うっ！　テ、テクニシャンじゃないか。ほ、本当は初めてなんかじゃなかったんだろう？」
ねっとりと、まとわりつくような視線を頭上から浴びせかけられながらも、柚子はそれにニッコリと柔らかな笑顔で応え、首を横に振った。
「ホントに……初めてです、よ？　……んっ、はぁ♥　こんな風に、男の人のおチンポおっぱいで挟むなんて……あぁああんっ♥　もぉ、暴れん坊なんだから……ん、ふ、……おっぱいから、おじさまのチンポ……ふぅん♥　と、飛び出しちゃう、よぉ♥」
胸に挟む――所謂パイズリをするのも初めてなら、父親以外の男性器をまともに見ることさえ今回のコレが初めてだった。なのに、どうしてこんなにも自然に振る舞えているのか……不思議だった。
（なんか……フワフワする。……お酒のせい、かな？）
今、こうして肉棒を胸に挟み奉仕している名も知らぬ男性から夕飯をご馳走になった際、勧められるまま口にした酒の味を反芻し、柚子は熱っぽい頭を「まぁ、いいか」と適当に納得させ、一心不乱に胸を動かした。
「おっ、おおおお……～～～、い、いいよぉユズちゃん！　街で君を見た時、一目でねぇ、凄いオッパイだと思ったんだが……おじさんの見込んだ通りだよ！　こ、こりゃ、凄い……こんなに気持ちいいのは、久しぶりだよ」
「私もぉ、男の人の勃起したおチンポって初めて見たけど……んっ♥　これも、すごいです、よぉ♥　それとも、おじさまのチンポが特別大きいの？」
「はは、う、嬉しいことを言ってくれるじゃないか。よし、それじゃもう少し激しくするけど、いいかい？」
「え？　――むごぅおおおぉぅぶふぅうううううっ!?」
答えなど待たず、男性は強引に剛直を柚子の喉奥まで突き入れると、そのまま腰を振り始めた。今までの動きなど序の口だったとばかりのピストンに柚子は目を白黒させた。呼吸さえままならない。なのに、苦しいのに、熱に茹だった頭は興奮し、感じてしまっているのだ。
（ああ……おじさん、スゴイ顔してる。なんだか、怖い……のに、変だなぁ。……かわいい、とか、思っちゃうの。……はぅっ♥　ああ、ホント、変……蕩けちゃいそう♥）
ただ快感を求め腰を振る男性の顔に、街で声をかけられた時に錯覚した面影は既に無かった。
けれど、もうどうでもいいのだ。
必死な形相からは、求められているという実感がした。まるで今ここにいることを許されているかのような温かな気持ちに、柚子は涙が出そうだった。
（……私、いいんだよね。ここに、いて）
「んぶっ!?　が、けはっ！　……お、おじさ……激しすぎ……少し、息、吸わせ……んひぃいっ♥　やっ、チンポそんな風にほっぺに擦りつけちゃダメ……やっ、くすぐった――ひゃぁああんっ♥」
ようやく口内から剛直が引き抜かれ、息が出来るようになったと思ったら今度は亀頭を頬や額に擦りつけられて柚子はくすぐったさに喘いだ。
不思議だ。
男性器を顔中擦りつけられて、本当なら嫌悪感を抱くような場面のはずなのに、全く嫌だとは思わなかった。むしろ中年男性のまるで子供のような行為に愛しささえ覚えてしまう。
「ああっ、ユズちゃんの身体はどこもスベスベしてて気持ちが良いよ！」
「ひゃっ♥　も、もぉ……イタズラチンポなんだからっ♥」
……例え、その愛しさがまやかしであったのだとしても。

■■■

自分ではダメなんだろうな、と。何となく、そう感じてはいたのだ。

曲がりなりにも幼馴染みとして、長いこと一緒に過ごしてきた相手なのだから、彼が自分に対してただの幼馴染み以上の感情を抱いていないことくらいはとうに知っていた。

知っていてなお、好きだったのだから仕方がない。恋とは元来ままならない感情で、負け戦であるとわかりつつも止めようがないのだと、常に実感しながらのとても長い初恋だった。

明確にふられたわけではない。

彼が、あの東京封鎖を共に戦い抜いた、自分とはまるで異なるタイプの少女と結ばれたのを柚子ははっきりと目にしたわけではなかった。

だが、わかってしまったのだ。

皮肉にも、彼のことを誰よりもよく知っているのだという自負によって。

昨日までと異なる雰囲気。異なる貌、視線、声。

何もかもが別人のようで、けれどその変化は決して悪いものではなく、なのにそうさせたのは自分ではないのだという敗北感。

それでも柚子は、空元気というものの意味と効用を心得ていた。

どんなに打ちのめされても決して表には出そうとせず、努めてそれまで通りの自分を保ち、演じようとし続けた。自分にはそれが出来るはずだと過信してしまっていたのだ。

ゆっくりと狂い始めた歯車に気付いたのは、果たしていつだったろう。

まず彼やその親友でもあるアツロウとの会話が減った。次にあんなにも好きだったハルの曲を聴く機会も少なくなっていった。笑顔でいる時間が目に見えて短くなった。母親との喧嘩がどうにもならないくらい増えた。

壊れていく自分や、日常から、柚子は目を逸らした。あの地獄のような東京封鎖――七日間を戦い抜いた自分はこの程度ではへこたれないと、何度も何度もそう言い聞かせては鏡の前で空虚な笑みを形作っていた。

……流せなかった涙は、いずれ心を決壊させるのだとも知らずに。

そして、その日は訪れた。

最初はいつもと同じような口論だった。母親との喧嘩などとっくの昔に慣れてしまっていたはずなのに、その日は何かが微妙に異なっていた。

既に自分の心が限界に達していたことを自覚できていたなら、まだ取り返しはついたかも知れない。

……が、所詮はたらればだ。

最後に自分は何と叫んだだろう。母はなんと怒鳴っただろう。

気付けば、柚子は家を飛び出していた。財布と携帯と、今やただのお守り程度にしか意味を為していないＣＯＭＰを持って、夜の街へと駆け出していた。この期に及んでもまだ流れない涙に舌を出してやりながら。

自暴自棄というのがどんなものか、柚子は知った。

……本当は、もうずっと長いこと知っていたのに目を瞑っていたのだ。

キリキリと痛む胃を、ギリギリと歯軋りしながら堪え、夜の繁華街を当て所無く、生ける屍のように徘徊した。

そんな少女に男が声をかけてきたのも、ごく自然な流れと言えた。

「お嬢ちゃん、どうしたんだい？　こんな遅くに一人で歩いていたんじゃ、危ないよ？」

本心から自分の身を案じているのでないくらい一目でわかった。

酒の入っているであろう赤ら顔に、まるで品定めするかのような視線。あわよくば親子程も歳の離れた少女を好きに出来るかもしれないという期待に打ち震えた、下品な笑顔。

それなのに、どうしてだろう。

そんな男の声が、懐かしい、父の声のように聞こえた。似ているという程でもないのに、父の面影がだぶって見えた。

亡霊のように歩いていた自分に声をかけてくれたことが、嬉しかったのかも知れない。なんて、単純なんだろう。自嘲気味な笑みを浮かべ、柚子はその男性を見上げていた。

――一緒に食事をしよう、と。

あまりにもお約束過ぎる誘い文句だった。

（……話、するだけって言ってたもん、ね。ご飯食べて……ちょっと、お話するだけ）

そうして、食事は概ね平和に終わった。ほんの少しだけれど勧められるまに酒を飲んだりもして、何だかフワフワして、良い気分だった。食事が終わり、そのまま『じゃあさようなら』なんて、済むはずもない。

気がつけば、柚子は男性と連れ立ってホテルの一室に入ろうとしていた。ラブホテルなんて当然初めてだ。

(……シャワー、浴びさせてくれるって言うから……そう、それだけ。家飛び出して来て、汗かいちゃったし……臭いの、嫌だし)

そう言い訳しながらも、現実から逃避しきれる柚子ではなかった。

わかっている。

わかっていたのだ。これから、どうなるかなんて。

「ユ、ユズちゃん!」

「ひっ!? いやぁあああああっ! やだッ、なに、放してっ!?」

部屋に入った途端、男はシャワーを浴びる暇さえ与えず柚子を背後から抱きすくめ、そのままベッドまで引きずると押し倒してきた。

「い、今さらイヤって事もないだろう? ああ、それともそういうプレイなのかな? で、でもねぇ、ふ、ふはぁ、はぁ、……ユズちゃん、おじさんもう我慢出来そうもないよ!」

飢えた獣のような男の目に、柚子は恐怖した。悪魔と戦った時とはまるで異なる、女としての恐怖だった。しかしどんなに怯えようと、泣き叫ぼうと、助けは来ないし、男は手を止めようとはしなかった。

「わ、私はそんなつもりで……ひぅっ!」

「ユズちゃんの腋、すっごいイイ匂いだよ……最高だぁ!」

抵抗しようと多少暴れたせいで余計に汗の流れ出た腋に鼻先を押しつけられ、柚子は藻掻いた。男は見た目よりも頑強で力強く、女の細腕でどうにかなりそうな相手ではなかった。

「フン、フッ……汗で蒸れて、なんだか酸っぱい匂いがするよ。臭いなぁ」

「やっ、やだ! 嗅がないでぇ——ヒッあっ!?」

さらに、水っぽい……まるでナメクジに這われたかのような感覚が腋の下に走り、柚子は全身を震わせた。

「ああ、しょっぱいなぁ……これがユズちゃんの味なんだねぇ」

舐められたのだと、気付いた瞬間柚子は例えようもない怖気に襲われていた。異性の性欲や衝動、趣味についてそう造詣の深くない柚子にとって、彼の行動は異様なものとしてしか認識できなかったのだ。

「や、やだぁ……う、うぅ……やだ、よぉ」

泣き出した柚子の身体に男は所構わず手を伸ばした。腋の匂いを嗅ぎ、舌を這わせながら、腕に触れ、腹を撫で、胸を軽く揉む。押し倒した時の激しさが嘘のように手つき自体は優しかった。そのねちっこさがむしろ底知れず、柚子は余計に怯え、啜り泣いた。

「はは、はぁ……ユズちゃん……ユズちゃん」

抱き締められ、男の匂いが一気に鼻を、さらには肺まで全て満たしたように感じられた。臭いとか臭くないとか考えるよりも先に、柚子は何とか逃げ出そうと身体をくねらせ、

「ヒッ!? や——んむぅうっ!?」

野太い腕で頭を固定された直後、唇を、奪われていた。

「んちゅ、……ん、むぅ……レロ……んっぷ! ふぅ、んぷぅ……は、ははぁッ……ちゅぷっ、れろれろ、じゅぷ、じゅるる……んろ……」

その下品な音が、自分の口の中を啜られている音なのだと気付くまでには数秒を要した。気付いてからも、柚子は呆然と、真っ白になった頭の中でまるで他人事のように、今のこれが自分にとってのファーストキスだったことを思い出していた。

「ふぷ、ふぅ、……じゅぷっ……はぁ。ユズちゃん……ッ! んっ、ちゅ、ペロペロ……んんッ、じゅずっ、ぷ……んぷ……ッ」

「んっ、ふ、むぅ……〜ッ! んむ、む、……ぐ、ひむぅ……ンッ」

今さら抵抗など遅かった。それに、口も舌も満足に動いてくれなかった。男の為すがまま、絡め取られた舌は転がされ、口の内壁は散々に舐め回されて、唾液はジュルジュルと下品に吸われた。かと思えば男の唾液が流し込ま

れ、口の中を満たしていく。
臭い。
男の口臭もそうだったが、唾液も吐き気を催しそうになるくらい臭くて、柚子は大粒の涙を零した。その涙さえ、男は勿体ないとでも言いたげに舐め取っていく。それらの行為はまるで柚子の全てを舐め尽くし、食べ尽くそうとでもしているかのように思えた。
「んぷっ、……はぁ。……美味しいなぁユズちゃんは。なんて美味しいんだろう……最高だよ」
ようやく解放された唇に、柚子は震えながら手を伸ばした。自分と男の唾液が混ざり合い、ぬめったそこに指で触れ、呟く。
「わ、たし……キス……初めて、だったのに……」
改めて言葉にした途端、また泣きたくなった。
いったいいつの頃からだったろう。ただの幼馴染みだった関係が、やがて柚子からの片想いへと変わった時から、初めては全て彼に捧げたいとずっとそう思い、願ってきた。
なのに現実はこうだ。何一つ彼になど捧げられない。何故なら、彼がそう望んでいないから。結局、片想いは最後まで片想いのままで、自分はどうしても幼馴染み以上の存在にはなれなかったから。
だから、ファーストキスなんて、こんなものなのか、と。あまりにも惨めな自分の境遇に柚子の顔が歪み、泣き崩れようとした時だった。
「んっ、……ちゅ、れろ」
「ふ……んん、む、……ぅ……？」
今度は先程よりも幾分か優しく、男が口づけてきた。反射的に口を閉じた柚子の唇を舌で丹念になぞり、無理にこじ開けるような真似はせずそのまま口周りや頬に何度も口付けていく。
くすぐったいような、もどかしいような、不思議な感覚だった。
「ちゅっ……ちゅぷ、ん、……ふむ……」
「……ぁ……んっ、……ふ、ぁ……ん、ぅ……ひ……ぅぅ、んっ」
ショックのあまり見開かれたままだった目が、次第にとろんとなっていくのを自覚し、柚子は余計にわけがわからなくなった。
キス、されている。
ファーストキスを奪われ、セカンドキス、サードキスと。何度も何度も親子程も歳の離れた男に唇を吸われ、舐められ啄まれ、なのにあれだけ心を支配していた嫌悪感が薄れてきているのだ。
（……私、……なんで？）
眉間の皺が薄れ、眉が垂れ下がっていく。睫毛が揺れ、瞼が落ちて半目になった視界に映っているのは相変わらず懸命に柚子を求めてくる男の顔で、けれどどうしてなのだろう。
いつの間にか、柚子は堅く閉じられていた口を、開けていた。
「……んっ、……ぁ……ん、ちゅむ……んっ……ちゅぷ……は、ん……ぁ、ふぅ……んっ、ぁあ……っ♥」
上下に分かたれた唇を、男の舌が丁寧に舐め、ゆっくりとより大きく口が開かれていくのを柚子は止めようとはしなかった。
何も変わっていない。
男は男のままで、口臭も唾液から漂う匂いもやはり嫌な匂いのはずなのに、気にならなくなっていた。それどころか、スンスンと鼻が鳴っているのだ。
（や、やだ……私、これじゃ自分からおじさんの匂い嗅いでる……あっ）
「ふ、むぅ……んっ♥　ちゅぱ……ん、ちゅっ、ちゅぷ、……じゅる……んんっ、ぅ、ふぅんっ……ん、ぁ……ふぁあ♥　……んっ、れろ……ちゅじゅ、ズッ……ちゅっ……んぷっ♥　……んんっ、ふむぅうんっ♥」
おかしい。
変だ。
何かが、違っている。違ってきている。柚子は自らの異変に戸惑いながらも、勝手に伸びていく舌を、変わらずにスンスンと鳴っている鼻を、そして火照っていく頬を、何一つ制御出来ずにいた。
今やキスされているのではない。完全に受け入れ、自分からもキスしてしまっている。男の動きのどこにも無理矢理としたものは無く、むしろ柚子の方にこそ徐々に激しさが生じつつあった。
（わかんない……私、なんで……わかんない、よぉ）
疑問が頭を埋め尽くしたのは、けれど僅かな間だけだった。次第に柚子の

思考はもっと熱い何かに支配され、呑み込まれようとしていた。
その熱いものの正体を掴もうと、柚子は微かに残る思考力を駆使して懸命に考えた。考えている間も舌は貪欲に動き、鼻はヒクつき、唾液は溢れだらしなく零れ落ちていく。
「んむぅっ、……んっ、ぶ、ふぁあ……ユ、ユズちゃぁん……っ」
男に名を呼ばれた瞬間、また一段と熱が上がった気がした。
彼のそれは、あまりにも真っ直ぐな欲望だった。肉欲、性欲、支配欲、征服欲、……呼び方はなんでもいい。ただひたすら真っ直ぐに柚子を求める本能的な欲の塊だ。
だが、それが――
(……あっ)
――きっと、熱の正体だった。
(私、あんなに、すごく……必死に、求められてる……?)
長かった恋に破れ、母親との溝は深まり、全てに疲れ絶望したかのような自分を求めてくれる相手がいる。それはもしかして、とても嬉しく、喜ばしいことではないのか、と。
柚子は蕩けそうになる頭でそんなことを考えながら、躊躇いがちに舌を、そして腕を伸ばした。
「……んっ、ふむ、んっ♥　……ぁ……うぅんっ♥　……ちゅっ、ちゅ……ぷふぅ……んぁああ……っ、はぁんっ♥　……レロ、レロ……じゅる、ぷ……んんむぅっ、……ひゃ……ふ、はぁ……んぁあああっ♥」
男の背へと回した腕に力を込めながら、柚子は積極的に舌を絡め、求めに応えるかのように自らも求めた。
流されている自覚はあった。それでも、いっそ流されてしまいたかった。
「……んっ、ひゅぅうッ♥　い、ふぅ……ちゅ、はぁーっ♥」
今まで聞いたことのない自分の甘い喘ぎに、柚子の意識は次第に蕩けて崩れていった。

■■■

「んっ、……ん、ふ……はぁ……あ、あはっ♥　どうで、す？　横から、腋でズリズリ、ってすると……おチンポの先ッポが、私のオッパイに、チュッ、チュッって……キスしてる、みたいでしょ？　……ん、ふぁあ♥」
まるで戒めから解き放たれたかのように、柚子は男に奉仕しながら喩えようもなく淫らな言葉を口走っていた。淫猥な言葉を口にすればそれだけで悦んでもらえるし、自分も興奮する。そう気付いてからは、特に抵抗のようなものは無かった。抵抗があったのは、言葉よりもやはり行為の方だ。
フェラチオやパイズリくらいは聞き囓りで知っていたものの、腋を使うだとか最初はやはり変態のようで躊躇われた。しかし、求められる心地よさは柚子の中の常識、抵抗感を容易く打ち砕き、驚く程の短時間で自分から、若さと好奇心に任せてそのイヤらしい身体を駆使するようになっていた。
「あ、おぉお……ユズちゃん、ホントに、最高だよ……こんなんじゃ、おじさんまいっちゃうよ……おっ、おぉおおっ⁉」
「あぁんっ♥　このくらいでまいっちゃ、ヤアダ♥　もっとねぇ、こうして、腋の下の窪みとかでオチンチンの先ッポ、グリグリって……んぁあっ♥　これ、なんかスゴく興奮しちゃうっ♥」
「あ、あ、あぁぁぁ……うっ、ぐぅ……こ、こうなったら、おじさんも徹底的にユズちゃんと……ぐ、むふぅふふふっ！」
「ほら、ぁ……こうすると……くふっ、ふっ、……ぁ♥　腋と、おチンポが擦れて……すっごく、匂うの……クラクラって、キちゃう♥　おじさまのおチンポも……あ、はぁ♥　コレ、すっごぉい……腋から出てくる亀頭……赤ムケてて……エラなんて、こぉんなに張っちゃって……んっ、フフ、フフフアハハハハハッ♥　……ん、はぁ……チンポぉ♥　おチンポぉ♥」
匂いに対しても、嫌悪感など一切無い。むしろ率先して柚子は自分の汗と男の汗、尿、それに精液とが交じり合った匂いを胸一杯吸い込み、満足げな笑みを浮かべた。
「臭いぃ……臭いよぉチンポ臭いのぉ♥　私の匂いとおじさまの匂いがムレムレと混じってぇはぁあアンッ♥　すっごく漂ってくるよぉ♥　身体中に汗

とチンポの匂い染み着いてとれなくなるぅッ♥」
鼻腔に胸中、そんなところまで満たされる。自分を求めてくれる相手が身体の隅々まで侵入し、犯してくれている。なんて素晴らしいんだろう。
「うっ！　こ、このままじゃイッてしまいそうだ……腋に射精すというのもなかなかオツなものだが……」
「ひゃんっ♥」
男は名残惜しげに腋から剛直を引き抜くと、汗や唾液、それに先走りの汁にまみれたソレを柚子の眼前に突きつけた。
「ユズちゃん、今度はまた、オッパイで扱いてくれるかな？」
「うんっ♥　おじさま、そんなに私のオッパイ好きなんだぁ……あはは。嬉しいなぁ……チンポ、ギンギンになってる♥」
柔らかな乳肉で熱く滾った剛直を挟み込み、扱くと言うよりはこね回す。まるで胸で肉棒全てを呑み込んでしまったかのような、女子高生にして規格外のバストサイズを誇る柚子だからこそ可能なプレイだった。
「お、ほぉおおおっ！　お、おじさんのチンポ、ユズちゃんのオッパイに包まれて見えなくなっちまったよ……っ」
「どう、かな……こんなの。……ちゃんと、キモチ良い？　おチンポ、キモチ良くなってくれて、る？　……ふ、ぅんっ♥」
「あ、ああ……こんなのは、うっ！　は、初めてだよ……お、あぁあああああ……す、すごいいい……～～ッ！」
快楽の波に翻弄され、男は夢現であるかのように答えていた。今までに、若い頃の恋人にせよ、妻にせよ、商売女にせよ、何人もの女と関係をもってきたが、柚子程の女は初めてだった。最初は女子高生と一発ヤれれば儲けモノ、くらいに考えていたのが、どっぷりとはまってしまいそうになる。柚子の淫肉の虜となって、抜け出せなくなりそうだった。
「……はぁ。すっごく、勃起してるの……おじさまの、チンポぉ……♥　私に、興奮してるから、なんだよね？　……私のオッパイでチンポ挟まれて感じてるから、こんな風に反り返っちゃってるんだよ、ね？」
「そ、そうだよ……ぐっ！　ユ、ユズちゃんのオッパイがキモチ良すぎて、おじさんのチンポは今にも爆発しそうだよ……ッ！」
「あんっ♥　嬉し……んっ、ふ、ふぅん……～ッ♥　もっとお、激しく、おチンポ、オッパイで虐めてあげるね……ん、しょ、……お……んっ♥」
「お、おぉおはぁあああああっ！」
今度は反り返っていた剛直をやや水平に倒し、胸に谷間へと真っ直ぐ突き入れさせて柚子は身体を前後に動かした。縦パイズリ、というやつだ。
「ユズちゃ――ッ、な、なんて……ふぐぉおおっ！」
「おじさまも、腰振って……いい、ですよ……？　ん、んっ、ひぁ♥　こ、これ、乳首が……チンポと擦れて……私も、か、感じ過ぎちゃ……ぅッ♥」
なんとなく『こうしたらいいのかな？』くらいの考えで奉仕している柚子だったが、その選択はもはやある種の才能であるとさえ言えた。自分と、相手と。双方が最も感じ合える方法をまるで本能が選びとっているかのような、まさに天性の淫魔だった。
「ま、まるでマンコ……乳マンコだよユズちゃん！　き、君、本当に初めてなら、処女乳マンコだっ！」
「んっ、あ……おまん、こ？　……オッパイなのに、おまんこ、……なの？　……う、ん……私の、初めて……処女乳マンコ、犯されてる……ッ♥　あ……う、うん、違う……コレ、私が、おっぱいでおじさまのチンポ……犯してるみたい……♥　処女乳マンコなのに、おじさんチンポずっぽしって、犯しちゃってる♥　私が、チンポレイプしてるのッッ♥」
「そ、そうだよユズちゃ……ぅあああっ！　お、犯されてるのは、おじさんの方だ！　な、なんてスケベな子なんだい、君は！　お、おぉあああお……」
情けない声をあげて身悶える男に気をよくして、柚子はさらに激しく乳房で出来た性器を前後に動かし、あまりの快感により膨張したのか、それとも動きの激しさのせいか。ひょっこりと顔を出した亀頭を見るや、躊躇いなく舌を伸ばしていた。
「んっ、あっ……お汁、出てる……おチンポから……んっ、ぺろ……ふ、む……うぅ……んむっ♥　は、ぁ……なんか、変な味ぃ。……でも、嫌いじゃない……かなぁ……？　ん、フフフッ♥」
「そ、そうかい？　おじさんの先汁、気に入ってくれたかい？　じゃあ、次はたっぷりとちゃんとしたチンポ汁を飲ませてあげないと、ねっ」

「キャッ!?」
男の動きが、変わっていた。
まるで本物の女性器に挿入しているかのようなピストン。中年男性とは思えない荒々しい腰つきは、未だ処女の柚子を完全に圧倒し、翻弄していた。
擦れた乳首が痛いくらい勃起している。胸肉を掻き分けるようにして、何度も何度も目の前に現れる赤黒い亀頭、先端のワレ目が苦しそうにパクパクと開閉を繰り返しているのが見え、柚子はわけもなく胸を高鳴らせた。
どうしてだろう。ひどく興奮する。
「あっ♥　んあっ♥　やっ、チンポ、すごいの、チンポぉ♥　おじさまのチンポ、私のオッパイから出たり引っ込んだり……んぁあああっ♥　匂い、強いよぉッ♥　チンポの匂い、私のオッパイとSEXしてるチンポの匂いが鼻にツンときちゃうよぉおおっ♥　ふぁあああんッ♥」
肉竿に浮き出た血管がビクビクと脈動しているのが、乳肉を伝わって直接心臓の鼓動に同調していた。いっそう膨れ上がった亀頭はまるで今にも爆発しそうだ。
きっとこれから、もうすぐ射精するのだと、柚子にはわかった。
精液、スペルマ、ザーメン、チンポミルク……どう呼べば彼はもっとも悦んでくれるだろう。そんなことを考えてしまっている自分に呆れるより先に、柚子は腹の奥、子宮の辺りがキュンとするのを感じていた。
本来なら膣内に射精され、受精し、女を妊娠させるための精液が、女性器に見立てられた乳房に吐き出されるのだ。そこには種の存続という本能を超越したあまりに純粋な肉欲のみがあった。快楽のみを追求する、獣以下の行為。しかしだからこそ頭がおかしくなりそうなくらい興奮してしまう。
「ひゃぁあああああんっ♥　チンポ、じゅぽじゅぽいってるオッパイのナカですっごく大きくなってるぅぁあああああッ♥　す、すごっ、んひぃいいいいいいいぉおおおおおほぉおおおおおおッ♥」
頭も心も壊れてしまいそうだ。そのくらいキモチが良かった。
善がり狂う自分の痴態こそをまるで本性であるかのように、柚子は熱に浮かされた状態でそう捉えていた。
好きな人からも、母親からも、必要とされなかった自分。そんな自分をこんなにも激しく熱く狂おしく求めてくれる人がいてくれたという悦びが全身を駆け巡り、破裂しそうだった。
「射精るの？　ねぇ射精るんだよねっ!?」
「あ、ああっ、射精るよ！　おじさんのチンポ汁がっ、まだ処女のユズちゃんのオッパイマンコに乳内射精されるんだよ!!　うっ、うぉあ、や、ヤバい、こいつは……おぉあぁあ、ぐっ!!」
爆発は、時間の問題だった。乳肉を内側から押し分けるように、亀頭が限界まで膨張していた。陰茎の脈動そのものが速く激しく、早鐘のような柚子の鼓動すら追い越しそうな勢いだ。
「射精して射精してぇえええっ！　おじさまのチンポ汁、チンポ汁いっぱいチンポ汁ぅ♥　ユズのオッパイマンコに思いっきり乳内射精してぇえええッ♥」
「うん、うん！　するよ、するから！　乳内射精してこれでユズちゃんが孕んだら処女妊娠だよ！　おっ、おお！　……は、はは、オッパイで妊娠なんてするわけないけど、ユズちゃんの乳マンコならもしかしたらって気がするよ！　だってこんな、こんなにマンコみたいな、マンコ以上の極上オッパイが妊娠しないはずないじゃないか！　はぅうっ!?　ぐ、ぅ……あっ!!」
駆け昇ってくる。
熱く煮えたぎった奔流が、陰茎をまるでマグマのように。
そして――
「うっ！　おおおっ!!」
――柚子には、それが正真正銘の爆発に見えた。
「はっ♥　あっ♥　あぁあああっ♥　んぁあぁあああぁあああッ♥」
「っお、ぐぉうあッッ!!」
胸の中に射精されたにもかかわらず、収まりきらずに目の前に一気に溢れ出た大量の……精液。
グチャグチャに掻き混ぜられたヨーグルトを沸騰させたかのような、柚子にとっては全く未知の液体が胸の谷間から顔面へ向けて噴き出し、髪に、額に、目元に、頬に、鼻に、口周りに、顎に、首に付着し、プルプルと精子が震えているかのようだった。
「アアアッ♥　やっ、これ……ンッ♥　射精て、りゅうう♥　オッパイの、

中でぇ……んはぁあっ♥　チンポ汁ぅ、ブピュブピュッっていってるぅ♥
あ、お……んむぅ、ほぉおおおおっ♥」
　胸の中で、肉棒が何度も跳ね、その度にまだ射精し終わらない精液が放たれ続け、柚子の身体も快楽に波打った。
　射精された瞬間、柚子は絶頂していた。そこからはもう小さな絶頂を断続的に繰り返し、目からは悦びの涙を、半開きになった口からはだらしなく唾液を零しながら、自らの胸を見下ろしていた。
「こ、れぇ……ぜったい、ぜったい……わた、しぃ、……妊娠、したぁ♥
おっぱいに乳内射精（ナカダシ）されて、ぇ♥　……孕ん、だぁ♥　こんなにチンポ汁たくさん射精されひゃったらぁ、おっぱいでだって……ん、はぁあぁあ♥　孕むよぉお♥　わらひ、処女らのにぃ……アッ♥　ちんぽぉ♥　まだぁビクンビクンってしてるぅ♥　おっ♥　んほぉおおおおお〜〜〜〜〜ッッ♥」
「はぁ……はぁ……ンッ、ぅ、……うぅ……ふ、はぁあ……す、すごく、よかったよぉ……ユズちゃん……ユズちゃんが凄すぎて……おじさん、まだまだ元気だよ……は、はは」
　言葉通り、柚子の胸の中では依然として逞しいまま、剛直は萎えることなく勃起し続けていた。それどころかより怒張している気さえする。
「ふ、ふ……そ、それじゃ、次は……オマンコだけど……い、いいんだよね、ユズちゃん……？」
　一応の確認をとってくる辺りが、この男性の可愛いところなのだろう。そう考えると柚子はいつの間にか微笑を浮かべていた。
　処女をこんなカタチで捧げる。かつては想像もしていなかった初体験だ。
　けれど、構わないと思った。
　自暴自棄だからではなく、こんなにも真っ直ぐに自分を求めてくれる相手になら、捧げてもいいと思えたのだ。
　ほんの一瞬、彼の顔が脳裏を過ぎった。その幻影を打ち消すように、柚子は、ゆっくりと頷いていた。
「……うん、……いい、よ？　私の初めて……おじさんに、あげる……♥」
　パァッと、まるで子供のような笑顔を浮かべた彼が愛おしくて、柚子は身体をずらすと自分からキスをした。
「んっ……チュッ♥　……む、はぁ……あっ♥」
　男の手が、既に充分に濡れそぼっている秘裂に触れた。
　硬くそそり勃ったモノが、股間に擦りつけられてくる。
　優しい笑みを浮かべたまま、柚子は男を受け入れていった。

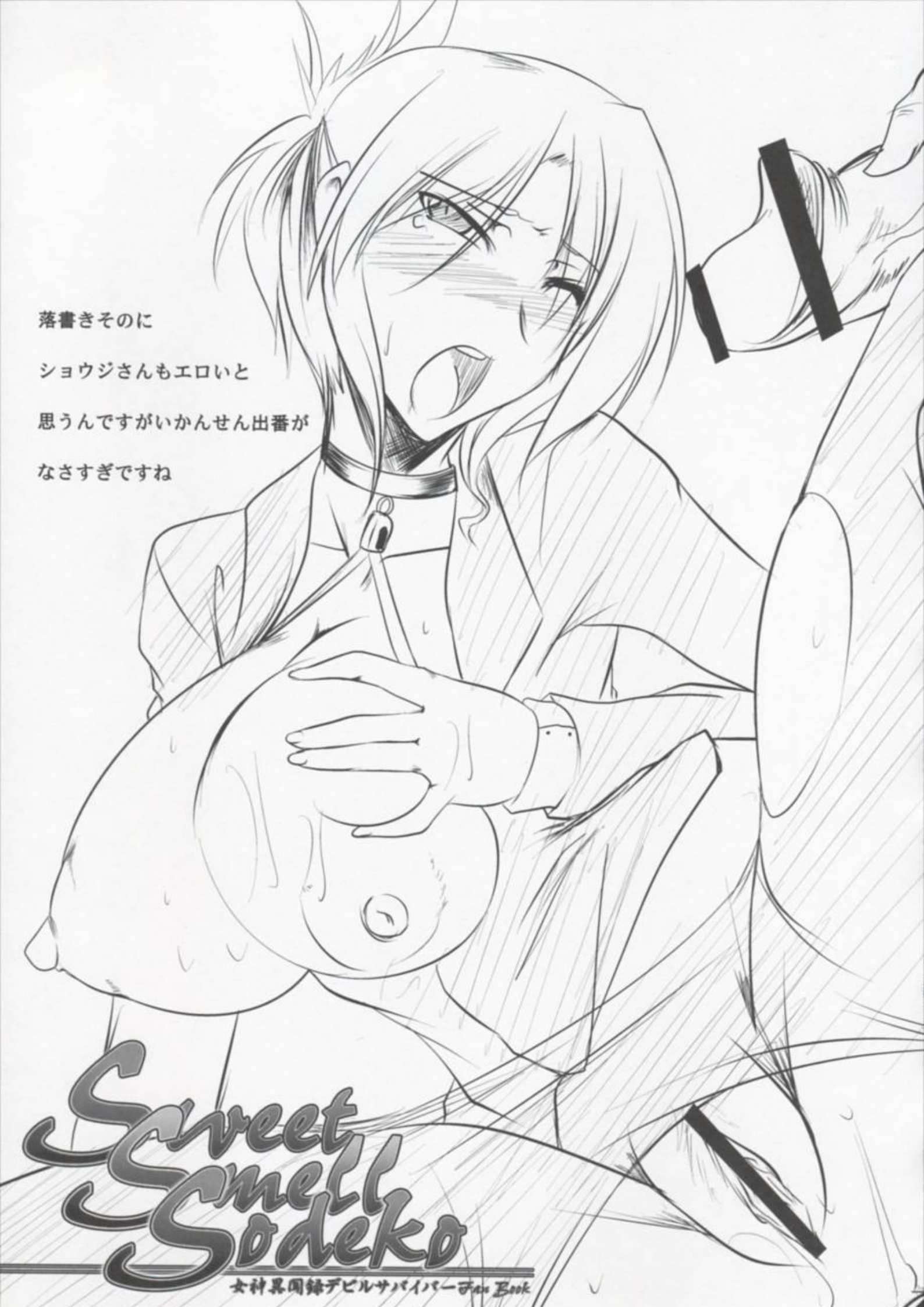
■■■

「また会ってくれるよね？」
　全てが終わり、疲れ果ててベッドに横たわる柚子にそう尋ねると、男は有無を言わさず一枚の紙切れと、数枚の紙幣を手渡してきた。
「これ、おじさんの携帯の番号と……少ないけど、お小遣い」
　一万円札が、四枚。売春の経験など無い柚子には、それが価格として高いのか安いのかはわからなかった。
「や、安くてごめんね。その、……まさか本当に初めてだったとは思わなくて。……もっとお小遣いあげたいんだけど、今は手持ちが無いから……。つ、次に逢った時はね、うん。奮発するから！　だから……」
　よっぽどまた逢いたいのだろう。柚子は身体を起こし、男の首に腕を回すと軽くキスをして、耳元で『うんっ♥　……イイよ』と小悪魔のように囁いた。途端、男の股間がまた少し膨らんでいた。
「……ホント、元気だね、おじさまっ♥」
　白魚のような手が、ソコに伸びる。
「おっ、おおっ!?」
「もう一回くらい、イケルよね？　……この、おチンポ……♥」
　その誘惑に耐えられる男など、いるわけがない。
　まだ火照ったままの裸身を絡ませ合いながら、二人は再び獣のような交わりに没頭していった。
　柚子は今、この上なく幸せを実感していた。

穴埋め落書きアマネ様

アマネ様はエロすぎるよホント

マインドも期待


落書きそのに
ショウジさんもエロいと
思うんですがいかんせん出番が
なさすぎですね
Sweet Smell Sodeko
女神異聞録デビルサバイバー Fan Book

↑

黒色彗星帝国様のコミコミ新刊表紙

今回の本の線画　　→

穴埋めページ

あとがき

はじめましてorいつも読んでくださりありがとうございます。寒天です。
デビサバ本は如何だったでしょうか。ソデコのオッパイは非常にエロス
ですね。 自分の本でその魅力の欠片でも出せればいいと思うのですが。
しかしデビサバは女性キャラがエロすぎて本を出さざるを得ない
自分が昔やっていた真女神転生のシリーズを思い出すと、随分とキャラ
ゲーになっていたので驚きですw アマネ様エロいよアマネ様
ソデコかわいいよソデコ ソデコの髪はなんというかポニテみたいに
なっているんですね。バンダナキャラは描きづらいのが難点です。
次回コミケは何描こうかと思っていますが、一応マブラヴか何かで
いこうと思っています。
それではこの本を手に取り、ここまで読んでくださってありがとう
ございます。 よろしければ次回の本も読んでいただけると幸いです。
次回の本はもっとクオリティを上げられるよう練習あるのみです。

奥付

誌名　：sweet smell sodeko

発行者　：寒天

発行サークル　：寒天示現流

発効日　：2009/6/7

印刷所　：(有)ねこのしっぽ

サークルサイト　：http://kantenjigenryu.web.fc2.com/

※18歳未満の購入、購読は遠慮してください。

Sweet Smell Sodeko

2002/6/7　宮天元理論